芸振

大分県芸術文化振興会議会報

県文芸特集号　No.4　46.1

発行所・大分市大手町　県教育庁社会教育課内　県芸術文化振興会議事務局

発行人・米　田　貞　一　　編集人・田　村　卓　夫

1971年を迎えて

県文芸復興の機会

加　藤　真　一　郎

大分県の文芸文化については<大分県文化百年史>に記述されているが、私が記憶している範囲でも、大いに振興した時代はあまりない。不毛の地といわれる所以のものであろうが、小説・随筆、詩、短歌、俳句それぞれに一応ジャンルの中で棲息はして来たし昨年は葉山耕三郎の歌碑が建立されたり歌集では田原愛氏、森山しのぶ氏が目立ったし、詩集にも江川英親、八幡黎二、練山昌信、入江昭三各氏が活躍した。

然し各部門ともに文芸の基盤となるような広場を持たず、またその広場というか、るつぼというか燃焼のエネルギーに欠げている詩にしても大分県詩人協会が生れたけれども、大分県の詩人達を魅力的に育ててゆくような場としての雑誌は出ない。短歌も八雲、朱竹、歌帖、竹田短歌、大分歩道、短歌げつしゆうと全部を並べてみても寥々としているし、ひところのような勢を欠いでいる。俳句は虹波、小説に文芸風土、文礫、耶馬台、稜とあるが何か一つ心棒を欠いだかたちである。こうした現況を地方都市だからとか、ジャーナリズムがないからだと思い込むのは早計であって、文芸に地方とか中央とかはない筈、小さい乍ら意欲的な円心があって絶えず回転していたら決して芽が立たないものでもないと思う。

賀　春　　武藤完一

（県美協名誉会員）

一つのジャンルに力がなく、全体としても活気がないとしたら、これは文学という一つの形で大同的な力をつける以外にないのではないか。

幸い<芸振>が県芸振会議の会報として既に活動を始めているようだが、より充実した編集で各種文化団体の各人に有料で配布したならば、県下各層に広く行き届くとともにそれは循環的により内容を拡げるものとなるであろうから、文芸全体の部門も<芸振>を仲介としてペンクラブ的活動をすべきではないだろうか。一つの力は他の力を収めて倍増しその力も又他の力を吸引してふくれあがるであろうし、或いは文芸不毛の大分に文芸が復興する機会をつくるかもしれない。力とはならないかもしれないけれども、一つのきっかけだけでも今年に出来たら収獲である。

（県芸振会議理事・県詩協会長）

詩

期待される県詩人協会

首藤三郎

昨年の県下の詩の動きは、珍しく活発だった。その大きな二点は、十数年ぶりの県詩人協会の発足と、これまでになく集中的に詩集が発行されたことだろう。

3月22日、かねての懸案だった大分県詩人協会が発足した。会員52名。戦前からのベテランをはじめ、現在第一戦で活躍している書き手から、高校生までと、その層は多彩にわたっている。主な内容は、各グループの横のつながりの機関とし、相互の研鑽と、後進の育成を目的とする。そのために、年4回の会報と年刊詩集の発行、その他随時に研究会、展示会を行なうこと。他のジャンルとの積極的な交流をはかる、などであった。

昨年実現できたのは、そのうち、雑誌形態の会報を3輯発行しただけに止まったが、約50編の作品と、随想4編を紹介することができた。

個人詩集の発行は、8月に高野弓子の「黒髪」が出版されたのをはじめ、10月に江川英親の「雁」、11月に八幡黎二の「愛の陀羅尼」、諫山昌信の「或る少年の手記」、その他、酒見忠則「在所へ」、なかみさを「カットグラスの痛み」などがあった。なかでも、江川の「雁」、八幡の「愛の陀羅尼」は、対外的にも、県詩壇の水準を示す力感あるものであった。

詩誌では、大分市の「心象」が着実に67号を発行したほか、国東の「門」が、これも見事に月刊を重ねた。個人詩誌では佐賀関の板井蓮生の「地核」が5号を発行、別府の「文芸風土」が2度にわたって詩の特集を行なったことなどが特筆される。

さて、個人、各グループが、それぞれの中で、現在生きているという関わりにおいて、自分を確かめる、それだけでよいのだが、対外的に、県を単位とした場合、やはり、一つの動きとしてはある弱さがつきまとうのではなかろうか。それぞれの孤立ということだ。いってみれば、運動としては内向的ということになろう。それに、いつの間にか、自分の姿だけしか見えなくなる。そういう、微視的な世界に陥ち入る危険が絶えずつきまとう。その中で、なお、自分の全身像から目を離さないということは、なかなか容易なことではない。その意味でも、詩人協会の今後が期待されるわけだが、発足9カ月あまりで、協会自体、すでに幾多の難問を抱えている。

その一つは、肝心の書き手の執筆がないということ。これは各所属詩誌に力を入れているためで、無理も言えないのだが、底辺を広げるためにも、いま一つ積極的な協力を、というのは私の望みすぎだろうか。それに、経済的な問題も大きい。現状では、会報の発行が精一杯で、その他のことは、ここ当分望めそうもない。

つまり、県詩人協会は、たしかに形の上では一応の発足をみたが、本当の意味での発足はこれからということになろう。したがって、県詩壇が大きく飛躍できるのも、すべてこれからということになる。　（県詩協事務局長、九州文学同人）

県詩人協会役員（会長）加藤貞一郎（事務局長）首藤三郎（各地区世話人）遠山宗、長谷目源太、郷司幸雄、岩尾恵子、仙川竹生、江川英親、島みちを、藤井国武、渡辺琢磨、板井蓮生（顧問）滝口武士、渡辺健。

俳句

民族の歌心は不覇なもの

津田露色

虚子没後、素十の「芹」会員が大勢を占めているようですがその素十が「芹」を廃刊するかの噂を聞いた。こうした作家たち、というよりも現代俳句の小沢欣一でさえが、俳句は「詩からはみ出した伝習の、特種芸文」と信じている。

詩――類―┌―俳　句　575――――┐
　　　　├―短　歌　57577――――┤―種
　　　　└―新体詩　5・7の繰り返し―現代詩―┘

ということになるので、現代詩を象徴の方向に絞ってゆくと、短歌となり、俳句となり、俳句を写実の方向に拡げると短歌となり、現代詩となる訳で、5、7の新体詩が歴史が浅かったため、現代詩に脱皮するのにそれ程抵抗を感じなかったまでの事です。

575は俳句の原型であり、創作にあたっては、いつ、いかなる場所にも現われる。ただ目的論からいえば、575には永遠に変わらない面と、時代と共に変わる面と持っている。これがなくては、毛虫に毛虫で終わるしかない。象徴をめざす民族の歌心は、本来的に、もっと不覇なもので、それでこそ現代俳

谷

八幡黎二

たれも行けない凶区をみつけた
あなたの肋骨を
涙の銀のすだれが貫ぬく夕まぐれ
羚羊もおりて来ない漂泊の
岩々の皺の下に
呪いの山蛭となって忍び入り
走る豹の脊のように
しなやかな凶区を

私の納められる骨壺をみつけた
あなたの虫歯を
鏃の錆が音をたててはぐれる夜明
ゆれやまぬ枝々がとざす苔の
わずかなふるえに
盲いた山椒魚となってさぐりあて
絞られたレモンのように
ぬれた骨壺を

（大分県詩人協会会員）

裏阿蘇の旅のこころは豆を打つ　平田寒月

大阿蘇の盆地の底の冬田かな

〈岡嶋田比良先生句碑除幕〉

湯治舟ほとりの句碑と親しまん

湯治舟来しと朝夕波止散歩

一本の楓の紅葉植木市　田原千暉

陶部落さらば抜群の筍よ

癌の子が電柱となる青平野

山麓に手拭うごく日本の忌　津田露色

山岳も野火もかすむ　そこに　生きる証

車椅子並べ　花に散歩の　身障者たち

診療をこばまず　二日に来た　患者を診る　山田こころ

過疎とはしずかにしずむ夕日になっている村

めがねふきふきかけひきのあるはなしとおもう

句に脱皮するのです。

いわゆる現代俳句では「石」グループがあって、活発な創作活動が続けられている。「石」主宰の田原は、中央に多くの知己を持っているけれど大きな勢力を持つまでに至らない。

５７５は初めも言ったように、時代とともに変わる面があるということは、必ずしも５７５でなければならないということではなく、と同時に季題も絶対条件とするものではない。だから、５７５と季題には従順であっても、もたれかかるものではないのです。

現実にホトトギスの人たちでも５７５オンリーで作っている作家はない筈です。ただ季題を絶対の条件としておりますが、「石」はそういうものには拘わない。どちらかと言えば、口語表現に傾斜しています。

口語同人は県外に多く、県下では十指を屈するに過ぎません私たちの言語生活は、文語ではストレートに来ないので、よそよそしい。ゆくゆくは口語表現をとるようになるでしょう。自由律俳句は、５７５も季題も否定していますから、口語句俳とは全く次元が違います。否定的媒介か、自己否定であるべきです。「層雲」作家は至って尠ないようです。この他、いずれの派にも属さない作家で句座を持っている人たちもいます。

（「虹波」主宰）

後継者づくりを

久保青山

どれくらい県下に俳句をたしなむ人がいるだろう。

有季定形俳句と現代俳句と、またその中間をゆく流派等さまざまである。これは他府県とかわりない。何といっても昔ながらの有季定形に属する人が多く、大分市を中心として別府・日出・山香・宇佐・中津・日田・玖珠・竹田・犬飼・三重・臼杵・津久見・佐伯・高田等各地にそれぞれ大きなグループがあり月一回昼に夜に吟行等を織込み句会を催している。これらの会に加入している人は比較的老齢の人が多く、一食欠いでも俳句が面白いという人、永久に続けるという人ばかりである。

このほか高校、職場、婦人会、青年団、公民館活動の一環として俳句を続けているものがあり、また過去における経験者を含め一万人内外と聞いているが、朝夕自然を自らたしなむ人は二千人程度である。

県における年中行事は、大分県反省の日の短文学大会、県芸術祭参加の俳句大会等があげられる。そのほか各流派の全国大会、九州大会、各地区での大会等は定期、不定期を問わず、かなり多く開催されている。その参加人員や開催方法は千差万別である。これらの大会になると出席者もうんと減り、作句に自信のある人ばかりである。私なんか俳句はつくっているが大会出席など……も遠慮して出席しない向きもある。しかしできるだけ同じ会、同じ顔ぶれということにならないようにしたいものである。

後継者はどうなるか。

短文芸ことに俳句における20、30代の若い世代との断絶は、3、4年前から問題になり、折りにふれては、活発な意見がかわされている。ある俳句会では昨年より会員の若返りを強く打ち出し、俳句を真に理解してくれ、永続性のある青年に対し男女の別なく、作句の指導を続け成功しつつある例もあるが、関係者はもっと深く考え、新時代にふさわしい俳句創作のための後継者づくりをする必要があろう。

（「芹」俳句会大分支部幹事）

県下俳句結社

＜定　型＞

（ホトトギス系）　中津新樹句会、四日市句会、宇佐山郷句会、山香芹句会、日出真清水句会、別府玉藻句会、別府芹句会、若草句会、鉄道句会、三益句会、玖珠俳壇犬飼句会、竹田かぼす句会、津久見句会

・平田寒月、遠入たつみ

＜非定型＞

（現代俳句系）　石　・田原千暉

（天の川系　口語俳句）　虹波　・津田露色

（層雲系　自由律俳句）　くさの会　・山田こころ

短　歌

県下全歌人の糾合を

田吹繁子

最近各地に歌会が新しく生まれている。既成の歌会ではその成果としての合同歌集が多く出版されたことは注目に値する。活版からとう写刷りまで形式も内容もさまざまだが、意欲的な点ではどれも同じである。杵築の青垣支社（代表・木城光枝）では150回歌会を記念して「豊後梅」を、木村主税の指導する津民短歌会(代表・本庄せい)は20年記念に「石楠花」を、山香短歌会(代表・白坂義雄)では「稜線」を、土谷まよ指導の豊後高田市のあけび短歌会では「あけび」を、大久保貞義指導の都野短歌会では「芹の花」２集を、加藤長指導の大南短歌同好会で

結社代表詠

あやしくも園に咲きつぐ海紅豆くちびるに似し赤き散り花　鶴見　英之

それぞれに友散りゆきて山の上のこの枯原にひとり佇む　林　八重

久住野の眼路のかぎりのすすき原夕風吹けば片なびきせり　下郡　峯生

どの家よりたつとも知れず裏町にテレビの歌謡ひびく夕暮　佐藤　久幸

満ち足らふもの美しく向日葵の花はまともに朝の日に向く　石田　修

落椿掃き寄せしかば山なせる紅の堆積を佇ちて惜しめり　村上　富六

大会入選歌より

さりげなく友の嫁ぐを告げし娘の刻かけて今宵鏡に向う　池田　稔江

垂直に鉄吊り上げし起重機が向き変ふる時鋭く軋む　奥田　昭純

働かず歌など詠みて病める身のわれを生かさるる平和を思う　丹下　正人

教え子に似し警官の規制うけデモのわが位置少し乱るる　井上　芳幸

は年刊歌集「土の香」3輯を、佐伯合同短歌会(委員長・長門はる子）では20冊目の年刊歌集「佐伯城山」をそれぞれ発行した。

歌集の主なものに松田晩夏・歌子「永久の喚き」森山しのぶ「透明の罠」田原愛「楽章」真鍋力「車椅子にて」などがある

歌誌には藤野武郎の「朱竹」が25巻、「歌帖」は6月葉山耕三郎主宰の死去により下郡峯生が後をつぎ26巻を、「八雲」は30巻を田吹紫子の編集で、村上富六の「短歌げっしゅう」は、121号を、工藤忠士の「竹田短歌」は60号、田口游の「風」32号、上田耕司の「大分歩道」が9号、「大分アララギ」は9月創刊、吉光茨の編集で2号まで出した。

県単位の歌会は宇佐神宮新年短歌大会が13回、県短歌大会は18回、県短文学大会は11回、芸術祭参加短歌コンクールは時事詠についての意見交換の時をもって特色を見せた。この他中津・山香・国東・臼杵・竹田などにも地区的な大会がもたれるようになった。これら既成の会は年と共に集まる人数がふえ質的にも順次向上しつつある。

ここに問題なのは、以上の歌誌にも会合にも関係なく中央誌のみによる優秀な歌人が幾人かあることだ、何らかの形で県内の短歌行事に参加してもらいたい。これは県下歌壇の本年の大きな課題として検討したいと思っている。

（県短歌クラブ会長）

川　柳

時代とともに歩む

内　藤　凡　柳

俳諧を母体とし、前句付から独立して 210年になるが、文化文政の頃川柳の本質からはずれ詩情から逸脱の期会がながかった。しかし明治36年坂井久良岐、井上剣花坊によって新川柳を旗印に、川柳本来の詩情に還元した。

大分県に吟社として名乗りを上げたのは昭和5年、別府番傘川柳会。8年に大分番傘が創立されて、竹田、臼杵にも結成されたが、太平洋戦争により一応立ち消えの形になった。

川柳は時代とともに歩む人間の生活を詠むので、いつの時代にも行き詰ることがない。自由奔放、天衣無縫が幸して川柳の持つニュアンスが歓迎され人口も年々増していることは力強いことである。

別府では番傘の会、松原の仲よし、上人のむつみ会、光の錦柳会、一柳会、上原の山手会、国立センターの同好会、荘園の会。大分番傘は新人との二本立てで活気がある。安心院のそこぎり会、鶴崎の会、鶴崎海陸は社員の情操と親睦にどの会も例句会を続けていることは心強いことである。

大分県には戦前大阪のふあすと川柳社の湯苔吟社、臼杵に金田眸花君の花火吟社が活動したが後続せず、今日では大阪の番傘川柳本社に属する一本で以上各地の川柳会をもって大分県番傘川柳連合会が結成され、一丸となって平和のうちに活動を続けている。昭和40年山海閣にて全九州川柳作家大会を主催、年1回九州各県に所を変えて大会が催されているが、45年9月第16回の別府北泉にて開催の時は 316名の参会者を得、大盛会であった。九州各県はもちろん大阪の本社からも大分県の川柳界は大きく評価されている。48年は大分市において開催の予定である。

今後の課題はいかにして川柳に青壮年層を入れるか、呼びかけるか。川柳人口をこれ以上殖やしていくにはどうすべきかということである。

（県番傘川柳連合会長）

本当のことを言わせる夜の海　別府番傘　成貞　可染

女丈夫の母幸うすく老い給う　大分番傘　進藤　邦郎

母ひとりお墓を守る子の出世　国立センター　前田　辰男

分譲地空の青さも地価に入れ　安心院そこぎり　坂本　機

頭数ほどに失対はかどらず　松原仲よし　丸山山布人

嫁が来てむすこの距離も遠くなり　上人むつみ　石野　雅子

小　説

不毛の地といわれるけれど

長谷目　源　太

県下の小説作品は、そのほとんどが同人雑誌などに発表され

たもの、あるいは創作コンクールなどに応募したものとである。したがって、どのような雑誌が発刊され、どのような創作コンクールに誰が、どのような結果で選賞されたかを概括すれば、県小説界を展望したことになる。

大分市では、約50名のメンバーを擁した『東九州文学』が休刊になってから久しい。一昨年の3月、高橋百代、肥川袈裟己などが『臼杵文学』と改題し、同じ『東九州文学』誌名を継承して1号発刊したが、そのままとなっている。同号に「ゆきずり」を発表した佐藤恒子は、高橋とともに熊本の『詩と真実』に加入している。『稜』は、長尾素明の編集。メンバーの全員が大正生まれだと聞く。同誌2号の「知恵の輪」（長尾素明）は好短篇であった。大分からは、近く『東九州文学』の創立メンバーであった加藤真一郎、宇都宮善克、江藤孝之助、秦静男長谷目源太らが、小説と詩を中心にした季刊文芸誌の発行を準備している。

別府からは、同人誌としては、志村泰治らの『文芸風土』、別府文学々校の機関誌『文礫』などがある。奈賀博史らも、批評を主とした『軌跡』を発行している。『板山文芸』は、数年間にわたって毎月確実に発刊し続けたが、編集者加藤敬吉の病気入院で休刊中。『文芸風土』では志村泰治の同誌8号「血液銀行」は、この数年間、県下で発表された小説作品のピークを示した作品といえよう。『文礫』では松下好孝、村上秀夫、右田徳義らが意欲的。松下の「鳴らないヴァイオリン」は印象深い作品。そのほか別府では、大塚俊英が、ドラマや童話に実験的な取り組みを見せている。

大分、別府以外では、中津の『邪馬台』が、総合的な地域文化誌として発行され、小説作品も掲載している。ここには「豆腐屋の四季」の松下竜一、宇佐には、ドラマ作家の今戸公徳がいる。日田からは、昨年、久恒隆弘らの『あざみ』が創刊されたが、メンバーには、詩人が多い。大分大学、別府大学、あるいは県内の高校文芸部発行になる雑誌もあるのだろうが、目立った作品は見当らないようだ。毎年11月には『高校文芸』が広瀬良博らの編集で出され、いくつかの短篇が掲載されているがよい資質を持っていても大学進学などで書けなくなってしまう人が多いようだ。

昨年は、九州、沖縄芸術祭に小説作品の募集があったが、これに応募した県内の作家は18名。第一席は伊東六郎の「あいつの声」、二席は長尾素明の「樹木とライフル」であった。応募の18篇は2、3篇が稚拙であっただけで、ほとんどが相当の水準内容を備えた作品であった。詩や短歌にくらべて小説不振の大分県といわれるが、かくも多数優秀な書き手が健在であることはうれしい。現在、九州各県、北九州、沖縄など九地区の優秀作が選考されている。その第一席は『文学界』に発表される九州における本格的な小説コンクールとして、今後の充実が望まれる。

そのほか、ことしは県労政協会主催の勤労者創作コンクールが復活する予定。これは県内の職場作家を対象としているが、かってすぐれた作品が集まった実績もあるので、また新しい書き手が現われるのではないかと、楽しみである。小説作品は、詩や短歌、俳句などと違い、雑誌活動ともなれば、相当のスペースを必要とするので、その運営が骨折りである。同人誌、サークル誌を問わず、編集者の犠牲的な努力なくしては、定期刊行はきわめて難しい。編集者の皆さんの健闘を祈りたい。

（九州文学同人）

文芸誌

着実な歩みの短文学同人誌

大塚俊英

県立図書館の企画、広報を担当している関係から、寄贈されてくる雑誌、個人出版物など、一応関心をもってみている。

しかし、「県内で発行されている文芸誌についての現況」といわれると、ちょっととまどう。そこで、本館に送付されてくる県文芸同人誌についての発行状況等を中心に述べることにする。

昭和44年、45年の発行状況は、別表のとおりである。

①毎月、または隔月に、定期刊行されている雑誌は、短文学関係のものが多い。

短歌では、「八雲」「歌帖」「朱竹」が毎月発行。「竹田短歌」「風」「げっしゅう」が隔月発行。川柳では、「高崎山」「ふない」が毎月。俳句では、「虹波」が隔月。詩では、「門」が毎月。「地核」（個人詩集）「心象」が隔月。文芸誌では「耶馬台」が隔月発行を行なっている。

②発行回数は少ないが、ことしも継続されたものに、俳句では「石」。文芸誌では「文芸風土」「文礫」「流域」「積」などがみられる。「積」は2年ぶり、「文芸風土」「文礫」は年2回、「流域」は年1回。44年度には、毎月の発行で活躍していた「板山文芸」、同人誌では、老舗の存在だった「東九州文学」（臼杵文学）は、いずれも、45年には、新刊をみることができなかった。灯がまったく消えてしまったのだろうか。それとも、かすかな発火点を持っているのだろうか。46年には、再び燃えあがる焔を期待している。確か、4、5年前には「蛍」「大衆文芸」「メルヘン」などあったような気がする。まったく消えたのかな？

とにかく、文芸同人誌の発行をつづけることが、どんなにたいへんなことか、わたしも感覚的にはとらえていたつもりだが今度の稿を書くにあたって、各誌の編集後記をみると、その涙ぐましい努力が胸にグサッとくる。

小説を主体とした、会員の少ない不定期発行の同人誌には、どこか血ばしった悲壮感がただよっている。

創刊号以来、2年目に2号を出版した「積」は『――あとがつづかないことをおびえから、8人の同人が1号づつ責任をもって8号までは何とかという希望を……しかし、いまは、2号を手にしたよろこびでいっぱい』とのべ、「文芸風土」（12号）では『くたばれ文芸風土』という記事がある。それには、『どのようにやれば生きのびるのか。生きのびるには、編集者だ』とのべていること、さらに『無理な会員募集や増ページなど』を原因として消えたらしい、他文芸誌や『細々と行ったが発展性になやむ』自分たちの雑誌についての若悩。「石」では『半分までタイプにしたが、あとが出来ず、遅刊になるより、

出来ただけでも、刊行しようか……」となやむあたり、その努力には頭がさがる。

そして「こんな賽の河原の中でも私は書くといえる作品を欲する」という内容を、文芸評論家の駒田信二氏が朝日新聞（45.12.23西日本同人雑誌評）でのべているのが印象に残る。（※文芸風土12号「ドラム缶」がほめられている）

いっぽう、毎月定期発行している短文学関係の同人誌は、編集後記も会員の消息が主体となり、神経のとがったところがない。また「耶馬台」のように小説部門で新人養成を行なっているなど安定ムードを感じさせる。

いずれにしても、これらの文芸同人誌の活躍が、県文学界に影響をあたえていることは確かだ。

近く本県でも、県社会教育課？のほうで、各文芸誌からの推選による作品集を出すときく。これらの一投が、文芸を志す人たちのしげきや力になれば幸いである。

（県立大分図書館主査）

県文芸誌発行状況一覧（昭44、45年）

※県立図書館に送付されてくるもののみ

部門	誌名	発行状況 44年	発行状況 45年	編集者	郡市	型
詩	心象	1、4、7、10月	2、4、7、9月	首藤三郎	大分市	タイプ
	地核(個人詩集)	1、5、8、12月	6、11月	板井連生	北海部郡	タイプ
	門	毎月	毎月	藤井国武	東国東郡	孔版
俳句	虹波	1、3、7、10、12月	2、4、5、10月	津田五	大分市	活字
	石	9月	6月	田原千暉	大分市	タイプ
短歌	朱竹	毎月	毎月	藤野武郎	別府市	活字
	風	1、2、4、6、8、10月	3、8、11月	田口游	竹田市	タイプ
	歌帖	毎月	毎月	下郡峯生	大分市	活字
	八雲	毎月	毎月	田吹繁子	別府市	タイプ
	げつしゅう	1、5、6月	1、6、7、12月	村上宮六	豊後高田市	活字
	大分歩道	9月	8、9、10月	上田耕司	大分市	タイプ
	竹田短歌	1、3、5、7、9、11月	1、3、5、7、9、11月	工藤忠士	竹田市	タイプ
川柳	高崎山	毎月	毎月	高丸思笹	別府市	タイプ
	ふない	毎月	毎月	近藤紫雲龍	大分市	タイプ
文芸誌	文芸風土	10、11月	4、10月	尾形美恵子	別府市	タイプ
	東九州文学	4、8月	なし	高橋百代	臼杵市	活字
	文礫	3、8月	1、6月	池田京二	別府市	タイプ
	流域	5月	6月	県庁文学サークル	大分市	タイプ
	耶馬台	3、6、9、12月	3、6、9、12月	清原敏孝	中津市	活字
	稜	なし	6月	長尾素明ほか	大分市	タイプ
	板山文芸	1、2、3、4、5、6、7、8、9、10月	なし	加藤敬吉	別府市	タイプ

聖夜に

松下竜一

クリスマスイヴには、昼間の雨がなお細りつつ残った。妻が、欲をせおって出かけようとするので
「なんだ、お医者か？」
と、私は問うた。風邪気味の欲を、昨夜も病院に連れて行っていたので。
「うん、お医者に」
妻は、あいまいな顔をして笑った。
「お医者じゃないな？」
「ウフフフ。うちが出かけたら寂しい？」
あっそうか。何かをたくらんでるみたいな、嬉しさを隠した妻の表情から、すぐに私は察する。――健一へのクリスマスプレゼントを買いに出るのだ。そうに違いない。何を買うつもりなのか、そこまではわからないが。
「健ちゃん。欲ちゃん、お医者ちくんに行って来るき、お父さんとおうちに待っててね。すぐ帰って来るから……」
といいふくめて、妻は出て行った。ちくんは注射のこと。
妻のたくらみに気付かぬふりして、健一と玄関に立って見送ると、細い雨はやんでいた。暗い歩道を遠ざかって行く妻が、小さい。
「母ちゃんなのう、ほんとは健ちゃんになんか買いに行ったんど」
と、私はささやく。炬燵に入った私の膝の間に入って来た健一と、絵本を見ながら妻の帰りを待つ。
――妻は三十分して帰って来た。
「かあちゃん、なにこうてきたん？」
と、健一がすぐにまつわりついて聞く。
「なあんだ、知っちょったん？」
妻は笑って、小さな包みを健一に渡した。
「ほんとは、健ちゃんの眠った枕辺に置いちょきたかったのんに……」
健一が包み紙を破ると、紅や青や黄の美しく細かな物がいっぱいにこぼれ出た。
「ワア、すごいすごい！」
と、健一が歓声を挙げる。
三十六個の色とりどりの洗濯ばさみ。
「安いプレゼントじゃろ。三ダースで一五〇円……考えたんよ、お金少ないから」
と、妻が笑う。うん、これはいい。とてもいいプレゼントだなと、私も笑う。夜の灯にきらきら光る三十六個ものプラスティック洗濯ばさみは、健一になんとゆたかな贈り物だろう、

「一番はじめなあ、おもちゃ屋に寄ったんよ。やっぱり今夜は、子供連れのお客さんがいっぱいだったわあ。――でも少しのお金で本当に健ちゃんに喜ばれそうなのなんか、見つからんでね……おもちゃ屋を出て歩いて行ったら、今夜はまだ魚屋が店をひらいていてなあ、とろ箱にいっぱい鴨を並べてた。鴨って、初めて見たわ。なんだかびしょ濡れで積み重ねられて、かわいそうやったなあ。……それでねえ、その魚屋の辻を渡ると、アーケードの端に雨をよけながら、お爺さんが一人かがみこんでなあ、自分の前にけんぽなしを並べてたんよ。あんな人見ると、哀しくなるなあ。自分とこに出来た少しのけんぽなし持って、どっか田舎から一人でクリスマスイヴに売りに来たんよなあ。なんだか、身体の不自由そうなお爺さんじゃった。オーバーの中にちぢこまるごとしてねだあれもそんな暗い足元のけんぽなしに寄って行く人おらんごたった……」
「少しでも買うてやればよかったのに」
「うん。そう思うたけど、なんだかそうするんが恥ずかしいて、行き過ぎてしもうたんよ……そこのアーケードに入ったら、急に、あっ洗濯ばさみがいいと思いついたんよ。それてまた引き返して荒物屋に行ったんよ。そしてなあ……」
妻は急に笑い出した。
「洗濯ばさみ三ダース包んでもろうてなあ、店の人に、もしリボンがあれば掛けてもらえませんかと頼んだんよ。クリスマスプレゼントらしくしようと思うてなあ。……店の人、おかしな顔してなあ、リボンはありませんといって、それじゃさげられるように紐でくくってあげましょうかといったんで、いいえいいですちゅうて帰って来た。……冷めたかった指がこごえてしもうた。ほら、洗濯ばさみをひらく力も出んわあ」
妻はいかにもこごえ切った指つきで、洗濯ばさみに力を入れてみせたが、ひらかなかった。

健一が洗濯ばさみで遊び始めたのは、いつ頃だったか。
最初は、紅や青や緑や黄のプラスティックの色彩に魅かれたのに違いない。その小さなものを、妻が洗濯ものの傍に散らばしていると、自分のポケットに幾つも入れて持ち廻っていた。
やがて、自分の指で洗濯ばさみのばねをひらけるようになってから、それで物を挟むことがこの上なく楽しい遊びになっていった。あれで、洗濯ばさみのばねは仲々強いから、それをひらけるだけの握力を、健一の小さな指はようやく二才になって持ち始めたのだ。
先ず、パッチン（メンコ）の一枚一枚を洗濯ばさみで挟んでは
「とうちゃん、できたできた！」
と、かざして歓声を挙げた。幼い知恵にはパッチンを洗濯ばさみで挟むだけのことすら、歓声を挙げたい程の創造行為であり、〈新しい世界〉が展けることらしい。
「そうか、よかったな、よかったな」
と、私は健一がパッチンをかざすたびにほめるのだった。それがひと月位前だったか。
この頃では、夜、長くとき流した妻の髪に沢山の洗濯ばさみをきらきらと挟んで
「わあ、かあちゃんきれい、かあちゃんきれい」
と、めぐりをはしゃぎ廻ったりするようになった。妻はされる儘に笑っている。
昨夜などは、六個の洗濯ばさみを複雑に挟み合わしていたが
「とうちゃん、トンネルトンネル」
といって私を呼びに来たのに引かれていくと、成程畳の上にアーチの型が出来ていた。
「汽車ポッポー汽車ポッポー」
といいながら、そのアーチの下に私が人差し指をくぐらせると、健一はこのうえない笑い声を挙げて欲んだ。

これからクリスマスイヴのめぐり来るたびに、洋子は今夜のことを想い出すことになるんだろうなあ――欲をおぶって冷たいイヴの町に沢山の洗濯ばさみを買ったこと。そして灯のついた魚屋には、鴨が無惨に積まれていたこと。アーケードの下で、一人の老人が少しのけんぽなしをひさいでいたこと。帰って来たら、指がこごえていて洗濯ばさみをひらくことも出来なかったてと。そして今、夢中で洗濯ばさみを挟み合わせている健一のこと……

（著述業）

著書　「豆腐屋の四季」（44年4月）
「吾子の四季」（45年2月）
「歓びの四季」（46年2月講談社刊予定）

波紋　働く人々に支えられた「芸振」へ

中沢とおる

県下ですすめられている芸術文化運動は、内容的にも広いし、地域的にもまた広い。だがそのすべてが芸振会議に集まってるいとはいえない。地域的には大分市中心にかたよっているし、内容的にはマスコミにのったものが多い。〝名もなも貧しく美しく〟明日にむけてひたむきに生きようとしている多くの芸術文化活動がもっと大切にされなければならない。そこには生ている息吹きがあり、喜びと悲しみと苦しみと怒りがある。人間がある。エネルギーの源泉がそこにある。そうした人々に愛され支えられる芸振会議であってこそ「県芸術文化振興会議」の名が冠せられる。

「県民オペラ」をうたう人々と、労働の汗にまみれながらうたを求める「労音」の会員や「みんなうたう会」の人々との交流がいる。「県美協」の画家たちと、激しい労働のなかに絵筆を握る「職美協」の人々との交流がいる。「造形劇場」と「労演」会員の交流がいる。芸術創造はイデオロギーと離れて存在はしない。芸術創造はイデオロギーを反映するための専門的技術を必要とする。この両者はたえず統一され、とぎすまされていなければならない。いま大分で咲き乱れている芸術文化の一つの到達点は、かって苦しい茨の中にあった。アカデミックな殻を破るための苦難の胎動があったように、いまの一つの到達点は永遠ではない。しかし自由主義を賛美する芸術の限界は、アングラ文化に象徴される抜け道のない深淵にはまりこんだ。破綻は既に誰の目にも明らかである。明日の芸術文化を創りだすエネルギーの源泉は働く人々の中からこそ求められる。それが歴史である。私はかたよったイデオロギーを主張するのではない。明日の大分の「芸振」を創り出すための火花をそこに求めるのだ。「芸振」とは本来そうあるべきものだし、それぞれの活動を物心ともにお互いの力で保障されあう場でなければならないし、そのいみで徹底した民主的運営が要求されるのである。

（大分勤労者演劇協議会委員長）

消息

• 第6回大分県芸術祭賞きまる

和昭45年12月2日、大分県芸術祭運営協議会が開かれ、芸術祭賞の選考を行ない、つぎの3団体におくることをきめ、12月8日の芸振会議の席上表彰式が行なわれた。

受賞団体　大分県高等学校文化連盟
　　大分県民踊連盟
　　大分県音楽協会

なお、芸術祭開会行事および県民オペラの公演のため尽力された中山開二、北村宏通、古長久子の三氏ならびに芸術祭参加団体に対し感謝状がおくられた。

• 佐々木憲一氏社会教育功労者として表彰される。

大分県児童文化研究会会長佐々木憲一氏は、文部省から社会教育功労者として表彰されることになり、12月10日の県社会教育振興大会の席上その伝達式が行なわれた。

• 第2回九州沖縄芸術祭文学賞地区優秀作品決まる。（応募作品大分県分18編）

入選「あいつの声」　大分市　東島英生
次席「樹木とライフル」大分市　長尾素明

入選作品は九州沖縄各県および北九州市から選出された作品とともに中央で選考のうえ、最優秀作品は「文学界」3月号に発表される予定である。

• 長谷目源太（九州文学同人、県詩人協会世話人）このほど1カ月のヨーロッパ視察旅行から帰県、第一詩集「わが農地改革史（仮題）」を今春出版の予定。

• 甲斐照子（県詩人協会員）　随筆集「神さまからのプレゼント」出版。

• 渡辺琢磨（県詩人協会世話人、詩誌「門」同人）大分合同新聞第7回読者文芸賞受賞。

• 首藤三郎（心象、九州文学同人）小説「長浜神社のこと（仮題）」25枚を1月31日NHKから放送。

• 宇治山哲平（国画会々員・別府市）毎日芸術賞受賞

食生活に奉仕する

ウエダグループ

レストラン ウエダ	大分市中央町1丁目 (TEL)④6090
レストラン 文化会館	大分市文化会館内 (TEL)④3954
カフェテラス ウエダ	大分市府内町3丁目 (TEL)②7734
レストラン 大分カントリークラブ	大分市吉野 (TEL)09759 ⑦1317
新日鉄明和寮	大分市明野2226 (TEL)⑧3909
東芝大分工場	大分市松岡3500 (TEL)⑦5161
ウエダフルーツ	大分市中央町1丁目 (TEL)④6090
植田青果(株)	大分市大手町1丁目 (TEL)②1211

編集後記

• 第4号の原稿締切りは昨年末12月31日だったが、1月30日になってやっと完全に揃った。県文芸界のむづかしさを知らされた様な気がる。

• どうかこの第4号が県文芸界に何らかのプラスになってもらえば幸である。できるだけ有効に利用されることを祈ります。

• 次号は3月発行、「県芸術教育」特集を計画している。これも大変な仕事になりそうだ。　（S）